

哲学研究の知見はいかにデジタル注釈環境構築に貢献するか： ジャック・デリダ「思考」講義の構造化を事例として

中谷碩岐^{1, a)}

概要：本発表では、20 世紀フランスの哲学者ジャック・デリダの 1960–61 年講義「Penser, c'est dire non」を対象に、哲学研究の知見を組み込んだデジタル注釈環境の予備的な基礎設計を提示する。TEI による構造記述を基盤に概念層と人物層を重ね、概念層では同一語形における文脈上の意味の差異を、人物層では固有名を伴わない潜在的言及を記述可能なオントロジーを提案する。「思考」講義における「non」の多義性と「époque」の事例を通じて、哲学研究者による意味の分節と人物関係の判断を、根拠と留保を伴う再検討可能なデータとして構造化する方法を示す。

キーワード：ジャック・デリダ、哲学テキストの構造化、概念の多義性、潜在的言及

How Can Knowledge from Philosophical Research Contribute to the Design of Digital Annotation Environments? A Case Study in Structuring Jacques Derrida's Lecture "Penser, c'est dire non"

1. はじめに

近年 LLM 等の技術が飛躍的に進展する中で、歴史学や文学、そして哲学といった人文学諸分野における資料の機械可読化の必要性が高まっている。他方で、各分野の資料に適したオントロジーの構築にあたっては、単に既存の構成を適用することは困難であり、そのためにしばしば、資料特性に応じた独自のオントロジーを設計する必要がある。実際にこれまで歴史学や仏典研究といった領域において、こうした設計の試みはしばしばなされてきた。[1] [2].

ベルゲン大学のウィトゲンシュタイン・アーカイブ (WAB) に代表されるように、近年哲学分野においても機械可読化の試みは進められている[3]. 哲学テキストの知的内容の記述に応用しうる基礎的な技術としては、概念体系を構造化する SKOS や、学術的主張と参照文脈を記述する ScholOnto・Micropublications などが知られている[4] [5] [6]. しかし、思想的な影響関係の中で思想を練り上げた哲学者のテキストは、概念の意味内容の多義性や、他の哲学者に対する暗黙裡の参照といった要素が本質的なものとして含まれるがゆえに、その構築に際して特有の課題を生じさせる。近年、こうした哲学のテキストの特有の意味論的構造を踏まえたオントロジー構築が求められている[7].

こうした背景を踏まえて本発表では、哲学研究者である発表者の知見を踏まえた哲学テキストの構造化に取り組むことで、哲学研究の研究水準で利用可能であるような注釈環境のオントロジーの予備的設計を提案する。具体的にはジャック・デリダによる 1960–61 年講義「Penser, c'est dire non」を対象として、TEI による文書基盤層の上に概念層と

人物層を設ける注釈環境を提案したい。とりわけ本発表が着目するのは、テキストを構造化する際に「概念の多義性」と「潜在的な人物参照」をどのように構造化するかという課題であり、概念層については、単語 non の出現と文脈上の意味との関係を、人物層については、単語 époque を手がかりとするフッサールへの潜在的言及を検討することで、この課題に応答する。この二事例を通じて、哲学研究の専門知が、単にデータに事後的な解説を付加するようなものではなく、オントロジーの具体的な構造、すなわちその内部のノードや関係、および意味の不確実性の記述構造の構築を可能にすることを示すことが、本発表の目的となる。

2. 「思考」講義とその構造化

最初に本節では、本発表で扱う資料、および構造化の概略について述べる。本発表が扱うのは、20 世紀フランスを代表する哲学者ジャック・デリダ(1930-2004)の講義「Penser, c'est dire non」(邦題は『思考すること、それはノンと言うことである』、以下では「思考」講義と略す)である。1960-61 年にソルボンヌ大学において行なわれたこの講義は、長らくフランス・カーンにある IMEC (L'Institut Mémoire de l'Édition Contemporaine、現代出版資料研究所)にその手書きの原稿が保存されていたが、研究者による文字起こしを経て 2022 年に Seuil 社から仏語版が公刊され、翌 2023 年には日本語訳が刊行された [8] [9]. 全 4 回と、同時期に行われた他の講義録と比較して必ずしもテキストの量が多いわけではないが、この時期のデリダの思想形成を理解するにあたって重要な講義であることが知られている[10].

¹ 大阪大学(独)日本学術振興会
The University of Osaka / JSPS

a) u084515g@ecs.osaka-u.ac.jp

本発表では手稿ではなく、2022年に公刊された仏語版を対象とする。本発表が提案する構造化環境は、TEI (Text Encoding Initiative) に準拠して本文の文書構造を記述する基盤層と、その本文を外部から参照するスタンドオフ型の意味レイヤーとからなる。意味レイヤーは概念層と人物層によって構成され、TEI 本文中の語または文に付与された xml:id をアンカーとして、意味や人物関係に関する注釈を関連づける (図1、表1)。

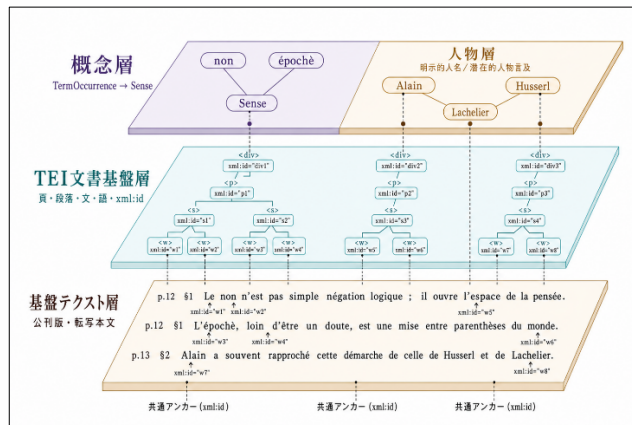


図1 注釈構造の全体イメージ

単位	件数	役割
頁 (div)	116	参照位置の単位
段落 (p)	118	文脈判断の基本範囲
文 (s)	1,089	人物参照のアンカー
語 (w)	23,132	概念出現のアンカー

表1 「思考」講義の TEI 文書基盤の内容

TEI 基盤層では、講義本文のページ、段落、文、語といった文書構造を記述する。今回仏語版をもとに暫定的に作成した TEI データでは、講義全体を 116 頁、1,089 文、23,132 語として構造化した上で、各ページを <div type="page">、各文を <s>、各語を <w> として区切り、それぞれに一意の xml:id を付与している。この識別子は、後続する意味注釈が本文上の特定の語または文を参照するためのアンカーとなる。たとえば本文中に 244 回現れる non も、それぞれ異なる識別子によって個別の出現として区別される。

TEI には、<persName>、<term>、<ref> 等によって人名、用語、参照を記述する仕組みがある。しかし、TEI によって文書構造と語の出現位置を符号化するだけでは、同一の語形が文脈ごとにどのような哲学的意味を担うのか、またある概念が暗黙にどの人物を参照しているのかを決定することはできない。そこで本発表では、TEI 上の語または文を注釈対象とし、それらを人物・概念ノードへ接続する意味レイヤーを設け、そのオントロジーの構築に取り組んだ。以下、順を追って、その概要を説明する。

第一の意味レイヤーである概念層は、本文に現れる語または語句の個別出現と、その箇所を実現している文脈上の意味とを区別する。前者を TermOccurrence、後者を Sense

として記述し、各 TermOccurrence を一つまたは複数の Sense へ接続する。このことによって、語の出現、意味、思想的帰属を同一の情報としてではなく、それぞれ独立して再検討することが可能になる。

その上で、本発表で提案するオントロジーの特色として、概念層では、すべての語に共通する意味分類をあらかじめ設定するのではなく、それぞれの語の用例と哲学的背景に即して、語ごとに固有の Sense 集合を構築する点がある。これにより、同一語のもとに複数の意味が存在する場合、出現ごとに区別して記述することが可能になる。

第二の層である人物層は、テキスト中に明示された哲学者・思想家等の人名だけでなく、固有名を伴わずに潜在的に参照されている人物を記述することを目指す点に特色がある。明示的な人名の場合には、基盤層に記録された固有名の出現を確認し、その指示対象を人物ノードへ接続することができる。これに対し哲学のテキストにおいては、特定の人物の名称を挙げていないにもかかわらず、特徴的な概念などの使用からその思想家への暗黙の参照が推察される場合がある。この潜在的言及の場合には、特定の概念、術語、引用、問題設定などを複合的な根拠として、固有名のない箇所を人物ノードへ接続することが必要となる (ただし当然のことながら、両者では同定の確実性の程度が異なるため、明示的な人名と潜在的言及は別の注釈種別として管理し、後者については同定根拠、確信度等の情報を併せて記録する必要がある)。

概念層と人物層は異なる主題を扱うが、実際の注釈では相互に関係することがしばしばある。ある語の意味を同定する際には、その用法がどの思想家や議論に由来するかが根拠となりうる。他方、潜在的な人物言及を同定する際には、特定の思想家に特徴的な概念や術語が手がかりとなる。ただし、概念上の帰属と人物への言及を一つの判断に統合せず、別の関係として記録することによって、一方の判断を変更しても他方を保持することが可能となる。

以上が「思考」講義注釈環境の概略的な枠組みである。現時点では、この設計を二種類の注釈データによって試行している。第一は、概念層の一般モデルを講義の中心語 non に適用し、同一語形のもとに区別される文脈上の意味を記述する試みである。第二は、特定の思想家への固有名を伴わない人物参照を同定する手がかりとして「痕跡概念」を提案し、その同定根拠と確信度を人物層に記録する試みである。以下では、それぞれを概念層と人物層の具体例として検討するが、これは、概念の意味および人物参照の同定を可能にするオントロジーの構築に、哲学史研究者の専門的判断が必要であることを示すものである。

3. 具体的事例

3.1 概念の多義性：「non」の分類

第一の事例は、概念層において、講義の中心語である non の出現とその意味との関係を記述する作業である。この単語は講義の題名 “Penser, c’est dire non” にも含まれる中心語であり、構造化した本文中には 244 回出現する。TEI 基盤層は、それぞれの出現が本文のどの位置にあるかを正確に記録する。しかし、個々の non をどのような意味で読むべきかは、位置情報だけでは決定できない。実際この講義において、non という語は無化（サルトル）、否定（ヘーゲル）、懐疑（デカルト）、還元（フッサール）といった複数の思想家に由来する複数の問題系と結びついており、その意味は前後の文脈や講義全体における立論を参照しながら個別に検討する必要がある（更にいえば、そもそも哲学的概念の一義的な意味の画定は不可能でさえある）。その意味の分岐を記述するためには、形態素解析や出現頻度の集計だけでなく、解釈を反映できる構造が必要となる。

そこで本設計では、あらかじめ一対一で対応する仕方で設定した意味カテゴリを割り当てるのではなく、具体的な用例を比較するなかで意味の差異が認められた場合に、新しい Sense を追加する方式を提案する。たとえば、「dire non（ノンと言う）」という表現における「行為としての否」と、「le non（否定）」のような「対象化/名詞化された否」は、異なる Sense として記述できる。さらに、「le non」の用例を精査するなかで、ノンが無化や懐疑との関係で用いられる箇所が確認され、それを既存のものでは十分に記述できない場合には、新しい Sense を追加する。このように、Sense は全出現を分類するために先に設定されるのではなく、具体的な用例間の差異が研究上の問題として弁別された段階で設定される。

実際の運用にあたっては、LLM を利用して暫定的な Sense の分類を行い、それを研究者がチェックすることによって分類を更新するという手法が考えられる。GPT-5.6 sol を用いて作成した「思考」講義の作業データでは、統語的特徴と周辺文脈から、①行為としての「ノン」、②名詞化された「ノン」、③訂正・対比、④非排他的付加（ex. Non seulement）、⑤oui/non の対、⑥その他の副詞的否定・引用等という六つの暫定カテゴリが設けられた（図 2、表 2）。

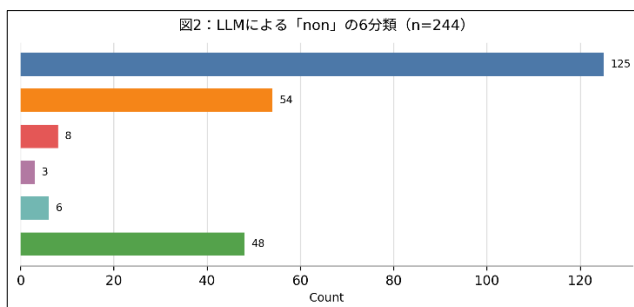


表 2: ID	分類種別	件数	位置づけ
01	行為	125	講義題名・中心命題
02	名詞	54	否の対象化・主題化
03	訂正・対比	8	non pas A mais B
04	非排他的付加	3	non seulement 構文
05	oui/non の対	6	肯定／否定の対立
06	その他・保留	48	自動分類不可

表 2 LLM による non のカテゴリ

この自動・半自動分類は最終的な語義決定ではなく、人手による精査の出発点である。たとえば、先述した人物別の概念の差異は、Le non を更に詳細に検討することによって分類可能であるだろう。この方式では、本文中のすべての語に対して研究者があらかじめ適切な意味を割り当てるという非現実的な作業を必要としないが、他方で同じ語形を一義的に処理するのでもなく、哲学史研究者の読解によって明らかになった意味の変化を、新たな概念カテゴリとして記録可能である。実際に個々の non が講義の論証において担う哲学的機能は、前後の段落や講義全体の構成を参照して判断する必要がある。このプロセスにおいて専門家の判断を必要とする。しかし、上述の LLM との連携により作業負担を抑えながら、読解の進展に応じて段階的に拡張することが可能となる。

3.2 潜在的言及：epochè の事例

第二の事例は、人物層において潜在的な言及を人物ノードへ接続する作業である。TEI 基盤層では、「Husserl」のような固有名が本文に現れる場合、その位置を persName などによって記述できる。しかし哲学のテキストにおいては、人物名が明示されないまま、その人物に由来する概念や問題設定が用いられることがままある。このような潜在的言及は、単純な文字列抽出では把握できず、概念の思想史的由来と前後の文脈を踏まえた専門的な解釈を必要とする。

本発表では、潜在的な人物言及を検討する手がかりとなる概念語を「痕跡概念」と呼ぶ（ex. イデア＝プラトン）。痕跡概念はある概念語の出現が特定人物との関係を示す可能性を評価するための、構造化された判断根拠の軸となるタグである。具体的には、判断の根拠として、概念と候補人物との一般的な結びつきを示す①人物特異性（exclusivity）、その結びつきが当該箇所には当てはまるかの度合いを示す②文脈適合度（contextualFit）、判断を支持あるいは拒絶する当該箇所の③周辺人物の配置（relatedPerson）の三項目を記録する。そのうえで、評価結果として、④暗黙の参照の確実性（certainty）を記録する。ここで重要なのは、exclusivity と certainty とを区別することにある。痕跡概念は単語と人物を一対一で対応させるタグではない。それは、概念の人物特異性、個別箇所における意味上の適合、周辺の人物配置、判断の確実性を組み合わせ、本文箇所と人物ノードの間に

再検討可能な関係を形成するための注釈モデルである。

この構造が有効である具体例として、「思考」講義 72-73 頁に現れる「*époque*」という語の例をあげることができる。この語が登場する箇所においてデリダが検討しているのは、ラシュリエという哲学者であり、それゆえ単純に読めば、この概念はラシュリエに紐づけられる。しかし同時にこの単語はフッサール現象学の重要概念として知られており、また同じ箇所の議論には「存在措定の停止」という現象学の用法との文脈適合が認められる。このような、本文にフッサールの名が明示的に現れない場合にも、*époque* を含む文を人物層の *anchor* とし、その文内のトークンを痕跡概念としてフッサールの人物ノードへ接続することは、実際の思想史研究や哲学史研究の実践水準での使用に耐えうるテキストの構造化に不可欠である。

とはいえ、この関係をフッサールからの影響として排他的に確定することはできない。議論の明示的な対象はラシュリエであり、デリダは *époque* を現象学的用法だけでなく、ラシュリエが属するフランス・スピリチュアリズムの問題としても扱っている。そのため、この箇所では、フッサールへの関係について人物特異性と文脈適合度を肯定的に評価しつつ、ラシュリエを競合または媒介する人物として保持し、排他的帰属を留保する必要がある。

先ほどの区分に照らすと、この事例に表れる研究者の判断を以下のように分節することができる。

項目	評価対象	<i>époque</i> 事例	判断
人物特異性	語と人物との関係	フッサールとの結合は強い	支持
文脈適合度	当該箇所での意味作用	存在措定の停止	支持
周辺人物	直接対象	ラシュリエ	競合
確信度	総合判断	probable (例)	probable
帰属留保	排他的確定の可否	True	複合関係を保持

表 4 *époque* 事例における判断根拠の分離

この記述構造によって、単純な影響関係ではなく、「ラシュリエに関する議論のなかで、フッサールに関係する概念が作動している」という複合的な関係を記述することが可能になる。これにより、人名検索だけでは見落とされる思想的関係を検索対象に含めると同時に、その関係を確定的な事実ではなく、根拠、確実性、競合する解釈を備えた再検討可能な仮説として保持することができる。

今回検討した「*non*」と「*époque*」の二つの事例では、ともに哲学史的判断が異なる水準で働いている。*non* の事例では、研究者は個別の語の出現をどの意味ノードへ接続するかを判断する。*époque* の事例では、本文箇所をどの人物ノードへ、どの程度の確実性によって接続するかを判断する。概念層と人物層を分けながら同一のアンカーを共有さ

せることで、意味の同定と人物関係の同定を相互に参照しつつ、それぞれ独立に検証・修正することが可能になる。

4. 結論と展望

哲学テキストにおける概念の意味や人物との関係は、語の出現や固有名に固定的なタグを付与するだけでは十分に表現できず、文脈に応じた意味の差異や潜在的な人物参照を記述するオントロジーを必要とする。本発表では、「思考」講義の TEI データを基盤としつつ、概念層と人物層からなる意味レイヤーの予備的設計を提案した。*non* の事例では、同一語形の個別出現と文脈上の意味を区別する方法を、*époque* の事例では、直接の論述対象と潜在的な人物参照を区別する方法を素描した。これにより、テキストの意味と人物関係を単純に一義的なタグへ還元せず、根拠と留保を伴う関係として記述することを可能にする方針を示した。

ここで哲学研究の専門知は、構造化されたデータを事後的に解説する外部情報ではなく、何を異なる意味として区別するか、どの概念を潜在的な人物言及の根拠とするか、その関係をどの程度確実と判断し、どの帰属可能性を残すかという、オントロジー内部のノード、関係、評価項目を決定する設計方針として機能している。この点から見て本発表の表題にある問いは以下のように答えられる。すなわち、テキストの解釈的判断を確定的な一義性へ還元せず、その根拠と可謬性を保持したまま、比較・修正可能な研究データとして構造化する、という哲学テキストが要請するオントロジーを構築するにあたって、哲学史研究の知見は有用であり、必要不可欠でさえある。哲学テキストを対象とするオントロジーは、対象テキストに関する一定の理解をその内部構造に組み込むことによって成立すると考えられる。

今後の課題として、第一に、概念の意味を区別する基準と潜在的言及を認定する基準を、複数の注釈者が適用可能なガイドラインとして整備する必要がある。第二に、痕跡概念による潜在的言及について、人物特異性、文脈適合度、周辺人物の配置といった判断根拠をどのように評価し、注釈の確実性へ反映するかを定量的に提示する必要がある。第三に、今回提案したタグ付けの手法が、どの程度 TEI に準拠した枠組みにおいて処理可能なのかを検証する必要がある。これらの検討を通じて、本発表で示した質的な注釈モデルを、哲学研究者の判断を代替するのではなく、その根拠と不確実性を比較・検証可能にするオントロジー環境の設計へと展開させることを今後の課題としたい。

謝辞 本研究は、JSPS 科研費 25KJ1726、および日本財団 HUMAI プログラムの支援を受けた。ここに記して感謝する。

参考文献

- [1] Hedges, M., Jordanous, A., Lawrence, K. F., Roueché, C. and Tupman, C.: Computer-Assisted Processing of Intertextuality in Ancient Languages, *Journal of Data Mining and Digital Humanities*, Special Issue on Computer-Aided Processing of Intertextuality in Ancient Languages (2017).
- [2] 左藤仁宏, 渡邊要一郎, 下田正弘: 仏教思想の概念体系の記述手法としての TEI マークアップの現状と課題, *じんもんこん* 2021 論文集, Vol. 2021, pp. 288-293 (2021).
- [3] Wittgenstein Archives at the University of Bergen : Wittgenstein Source (オンライン), 入手先 [〈https://www.wittgensteinsource.org/〉](https://www.wittgensteinsource.org/) (参照 2026-07-27).
- [4] Miles, A. and Bechhofer, S., eds. : SKOS Simple Knowledge Organization System Reference, W3C Recommendation (オンライン), 入手先 [〈https://www.w3.org/TR/skos-reference/〉](https://www.w3.org/TR/skos-reference/) (参照 2026-07-27) (2009).
- [5] Buckingham Shum, S., Motta, E. and Domingue, J. : ScholOnto: An Ontology-Based Digital Library Server for Research Documents and Discourse, *International Journal on Digital Libraries*, Vol. 3, No. 3, pp. 237-248 (2000).
- [6] Clark, T., Ciccarese, P. and Goble, C. : Micropublications: A Semantic Model for Claims, Evidence, Arguments and Annotations in Biomedical Communications, *Journal of Biomedical Semantics*, Vol. 5, Article 28 (2014).
- [7] Pichler, A., Fielding, J. M., Gangopadhyay, N. and Opdahl, A. L. : Crisscross Ontology: Mapping Concept Dynamics, Competing Argument and Multiperspectival Knowledge in Philosophy, *Quaderni di "Filosofia"*, No. 2, pp. 59-73 (2021).
- [8] Derrida, J. : *Penser, c'est dire non*, Gérard, B., ed., Seuil, Paris (2022).
- [9] デリダ, ジャック: 『思考すること、それはノンと言うことである——初期ソルボンヌ講義』, 松田智裕訳, 青土社 (2023). ISBN: 978-4-7917-7609-2.
- [10] 中谷碩岐: ジャック・デリダ『思考』講義 (1960-61) の現象学的解釈, *立命館大学人文科学研究所紀要*, 第 145 号 (2026).